

関係各位

大阪府環境農林水産部農政室長

病害虫発生予察情報について

標記について下記のとおり発表したので送付します。

病害虫発生予察注意報第 1 号

- 1 病害虫名 べと病
- 2 対象作物 たまねぎ
- 3 発生地域 府内全域（特に泉州地域）
- 4 発生量 多い
- 5 注意報発令の根拠
 - (1) 3 月上旬の発生予察調査において、越年り病株が複数ほ場で確認され、早生系品種では 2 次感染株（図 1、2）が確認された（3 月 5 日 防除情報発表）。
 - (2) 4 月 15 日及び 22 日での調査（泉州地域・表 1）では、べと病の発病ほ場率は 60.0%、発病株率は 15.5%と、平年値（過去 6 年間）の発病ほ場率 37.5%、発病株率 17.1%と比べて、発病ほ場率が高かった（4 月 26 日 防除情報発表）。
 - (3) 大阪管区気象台の大阪府農業気象速報（5 月 6 日発表）では、向こう 1 ヶ月の降水量は多い確率 50%日照時間は少ない確率 50%となっており、降雨、曇天が続くとさらに多発する恐れがある。



図 1 2 次感染株（発生初期）
（霜状のかび）



図 2 2 次感染株
（黄色で楕円形をした一般的な病斑）



図 3 2 次感染株
（急速に生じ進行した病斑）

- 6 生態と被害等
 - (1) 主に葉に感染し発病する（図 1～3）。2 次感染株の病斑は、黄色で大型の長卵形から楕円形をした病斑を生じることが多く、病斑上に白または暗紫色のかびが生じることが多い。
 - (2) 越年り病株が感染源となり、3～5 月に温暖（適温は気温 15℃前後）で降水量が多いと 2 次感染株（通常のべと病の病斑）の発生が増え、急速にまん延する。
 - (3) 胞子は通常 100m、強風時はさらに広範囲に飛散する。

表1 たまねぎべと病の発生状況

調査地点	発病ほ場率 (%)	発病株率 (%)
泉佐野市 8ほ場	100	21.5
岸和田市 7ほ場	14.3	8.6
平均 (15ほ場)	60.0	15.5
(参考) 平年値 (予察巡回地点過去6年平均)	37.5	17.1

※調査日 (4月15日、22日)

7 防除対策

- (1) 発生を認めたら治療効果が期待される剤を散布する。
- (2) 同一薬剤の連用を避ける。以下の薬剤を参考とする。
- (3) 散布については、同一成分薬剤の使用回数、収穫前日数に注意する。

表 たまねぎべと病の防除薬剤 (例) 散布にあたっては農薬のラベルを確認すること。

薬剤名	系統(FRAC)	種類	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
ベトファイター顆粒水和剤	その他(27) CAA(40)	治療 治療	2,000倍	収穫7日 前まで	3回以内
リドミルゴールドMZ	ジチカーバメート(MB) フェニルアミド(4)	予防 治療	500~1,000倍	収穫7日 前まで	3回以内
ザンプロDMフロアブル	CAA(40) QoSI(45)	治療 予防	1,500~2,000倍	収穫7日 前まで	3回以内
ホライズンドライフロアブル	その他(27) QoI(11)	治療 予防	2,500倍	収穫3日 前まで	3回以内
プロポーズ顆粒水和剤	クロロニトリル(MB) CAA(40)	予防 治療	1,000倍	収穫7日 前まで	3回以内
メジャーフロアブル	QoI(11)	治療	2,000倍	収穫前日 まで	3回以内

注) ベトファイター顆粒水和剤及びホライズンドライフロアブルなどに含まれるシモキサニルの総使用回数は、3回以内。ベトファイター顆粒水和剤及びプロポーズ顆粒水和剤などに含まれる成分ベンチアバリカルブイソプロピルの総使用回数は、3回以内。リドミルゴールドMZ、ジマンダイセン水和剤及びペンコゼブ水和剤などに含まれる成分マンゼブの総使用回数は、5回以内。

【参考】防除薬剤に関するホームページ

- Web版大阪府病害虫防除指針
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/shi shin/shi shin.html>)
- 農林水産省農薬登録情報提供システム
(<https://pesticide.maff.go.jp/>)
で確認してください。